

【前編】「変わりゆく雁道商店街」は瑞穂鯨城会便り 89 号に掲載

雁道商店街の入り口に道路幅の少し広いところがある。例年 8 月上旬の金曜日から日曜日の3日間この場所を車両侵入禁止として、七夕祭りが行われていた。七夕飾りは、商店街の両脇の街灯に添わせて、皆さんで付けられた。

いつ頃からこの場所で七夕祭りがおこなわれていたか尋ねると、昭和30年代の後半頃と伺った。

ものの本によれば、七夕の3月3日(上巳(じょうし))・5月5日(旧暦7月7日)は五節句の一つに数えられ、旧暦(端午)等の中に捉えられている。果たして雁道の七夕がこれに合わせて開催されるようになったかは定かでない。



しかし、竹笹に、赤、青(緑)、黄、白、黒(紫)の5色の長い吹き流しが飾られ五節句と同様に陰陽五行説にたどり着くことになるであろうか。笹には願い事の短冊も付けられた。

もし、今年も祭りがあったなら、新型コロナウイルスの撲滅祈願の短冊が多く付けられたことと思う。5色以外にも金や銀の吹き流しもあり、気分を盛り上げていたことには間違いない。祭りを盛り上げる屋台は、間口が一間位であろうか、簡単なパイプ造りで、中には白熱電灯(今ならLEDランプであろうか)の明かりと、どんなお店かを表す垂れ幕が前面につけられて道路の両側に並ぶ。

商店街の入り口には小さいながらも00建設贈の看板を付けた櫓が組まれ、紅白の垂れ幕が下がり、夕方になると盆踊りのお囃子とともに子供達や、そろいの浴衣姿のご婦人方の踊りが繰り広げられる。

雁道だからと言って名古屋踊りでだけでなく、炭

坑節から、郡上踊りの春駒まで踊られる。

時には高校生たちのブラスバンド。祭りが無くなる数年前までは大音響と共に、揃いの半被を着た多くの踊り子による鳴子よさこい踊りも繰り広げられた。大音響の音楽が聞こえると、忘れていた七夕祭りを思い出すことができた。少し暗くなり始めると、いったいどこからこれだけの人が湧き出てきたのかと思うほどの人出になり祭りは賑わう。

祭りはなぜか日頃の気分を一新し、気持ちが晴れの気分させられる。浴衣を着た初々しい若いカップルの姿も見受けられる。話が横道にそれるが、最近の男性は浴衣を締める帯を腰骨より少し上がったところで締めている。母親からよく言われた。「男は角帯を腰骨で締めよ」と。腰骨より上で締めると、なぜか寝間着のように見えてしまう。きりっとした男姿には見えない。このように思うのは私だけであろうか。七夕祭りを楽しむ大勢の人達。子供達にとっても祭りは特別の催し、初めて浴衣を作ってもらったのか、金魚柄や花柄のかわいい浴衣姿の女の子は、来年も着られるようにと帯のあたりで長めのおはしよりで調節してもらっている。

小さなお子さんは、お父さんとお母さんに手を引かれて嬉しそうに歩いている。

小学生くらいの子供たち数人が固まり、片手に団扇をもって盛んにおしゃべりをしている。

景品に向けての輪投げ、子供向けの空気銃で的の景品を落とすゲーム、小さな水槽に水の入った風船をすくうゲーム。夜店に定番の金魚すくいでは、小さなお子さんが財布からお金を出して店のおじさんに渡す。おじさんは脇に置いた小銭入れからお釣金を返す。子供は浴衣の裾を気にしながら座り込み、一生懸命狙った金魚を追いかけるが、紙で作った網はすぐに破けてしまい、一匹もすくえなかった。意気消沈。そこでおじさんは、小さなビニールの袋に金魚を2、3匹入れてくれる。

子供は少し嬉しい顔になった。

しかし、持ち帰った金魚をうまく育てることが出来るだろうか。お父さん、お母さんの顔が浮かぶ。

ガンダムやピカチューが並べて店には、日本手ぬぐいでねじり鉢巻き、腹巻代わりの大きな財布を腹につけて、「寄ってらっしゃい、見てらっしゃい」「テキ屋を殺すに刃物はいらぬ、雨の三日も降ればいい」……と寅さんの口上が聞けるかもしれないようなおじさんも。

祭りに欠かせない食べ物屋台も沢山並ぶ。イカ焼き、焼きそば、焼きリンゴ、チョコレートバナナ、クレープ焼き、たこ焼き、祭りしかお目にかかれない



綿菓子。ラムネを売る店もある。ラムネを初めて飲む子供は、中のビー玉をどのようにして外して飲むかわからないから、お父さんの力を借りることになる。ラムネは何とも言えない夏の匂いがした。

一夜明けて通りに行くと、夕方あれだけ沢山の人がいたのに、閑散としていて、屋台のおじさん達の姿も見えない。祭りは夕方と共にまた始まる。しかし、近年商店街が寂れていくのに合わせ、七夕祭りを維持していくことが困難となり、無くなってしまった。節目の「晴れ」の行事が無くなったようで寂しい。

雁道商店街の中ほどに南北に通る道がある。賑町通りである。祭りの飾りはこの通りにも飾られていた。賑町の少し南には古くからの乾物屋があり、看板には花かつお、椎茸問屋寅よし商店。店の入り口には海苔、昆布、椎茸とあり、店に入るとガラスケースに入った、幾種類もの削り子が売っており、以前は量り売りもされていた。今は時節柄か袋詰めの商品が置いてある。家庭で良い「だし」をとって料理を作ることが少なくなったのか、品数が少なくなったように感じる。

もう少し南に下がると、市中に出回らない稀有な酒を売る店がある、店に入った左側に平成10年と書かれた清酒の入った大きなステンレス製のタンク、昔であれば樽であったろう。また、その右側に数個の大きな甕が並ぶ。お酒の量り売りである。

甕には芋、麦と書かれている。店の壁には「森伊蔵」「十四代」「田酒」の張り紙も。今から二十年くらい前に、この店で「森以蔵」の一升瓶を買ったことがあるが、当時は2万円以下で買うことができた。

しかし、今では到底買うことができない値段になっている。

ところで、「森伊蔵を」初めて知ったのは、現役の頃九州へ行く機会があり、九州にはおいしい焼酎がありますと、紹介していただいたのが初めてで、「森伊蔵」を始め、「百年の孤独」「魔王」「伊佐美」「村尾」といった名高い焼酎であった。

焼酎と言えば、「いいちこ」「白波」「神の河」くらいしか知らなかったので紹介されたお酒を見てびっくりした。この時ロックで飲んだ「森伊蔵」のまろやかな美味しさは真においしかった。

手に入りにくい「森伊蔵」が、どのようにして賑町のこの店に並ぶのか伺ってみたい。この境界も時代とともに変化し、更地になった所、新しい建物に建て替わった所が多くなった。

広い敷地に建っていた建物がなくなると、そこには数軒の建売住宅が建てられている。あまりにも変化が速く、この場所にどんな建物が建っていたらうと考えさせられる。この先 雁道商店や、賑町は大きな変化をするに違いない。

何かしら記憶にとどめておきたいと雑文を書いた。

(完)

